

〔論 文〕

# ソーシャルワークにおける エンパワーメント実践展開研究の意義

西梅幸治\*

現在、エンパワーメント概念は、ソーシャルワークにおいて重視されてきている。しかしながらそれは、まだ整理し始められた段階であり、理念的であることが否めない。そこで本稿では、エンパワーメントがソーシャルワークに導入された意味を、ソーシャルワークの視点の推移から検討する。そしてエンパワーメントの登場背景とその概念を整理し、その主特徴として利用者認識を重視することを挙げる。その重視のためには、利用者とソーシャルワーカーとの協働によるエンパワーメント実践展開が必要であることを指摘する。

具体的には、利用者自身の認識からその長所や問題解決への知識や資源を探求する社会構成主義的見地と、それを生活全体から把握できるソーシャルワーカーのエコシステム視座との包括・統合的思考枠組みから実践を展開する必要性である。そしてそれをふまえたエンパワーメント実践を構築するために、思考枠組みから具体的な方法展開までの一貫した実践展開研究を行っていく意義とその課題を述べる。

## 1. はじめに

エンパワーメント (empowerment) 概念は、近年わが国の福祉、医療、教育、経営、社会開発などの幅広い分野で取り上げられている。特に社会福祉方法論分野では、一般的にソーシャルワーカーが重視する利用者の主体性や自己決定の尊重などとリンクしながらさまざまな場面で用いられてきている。この

ようなエンパワーメント概念は、米国でのアフリカ系アメリカ人による差別撤廃運動に関わったソーシャルワーク実践にその起源がある。そしてわが国でのソーシャルワーク研究や実践への応用については、米国におけるこの実践やそこからアイデアを得た活動を通じて成長した概念や方法が、1990年代に紹介、導入されたりことが契機となっていると考えられる。

このような動向のなかで、本学部での卒業論文に取り組むこととなった筆者は、無自覚にも機を同じく、利用者主体の社会福祉方法論であるエンパワーメントに関して検討する

\*にしうめこうじ (京都府立大学大学院福祉社会学研究科博士後期課程院生)

こととなった。振り返ってみるとその端緒は、学部での実習体験における現実の利用者との出会いと、その支援に関わりながら、利用者の主体性や自己決定の尊重について試行錯誤した経験からである。そこでは、現実の利用者を目の前にどのようにその人の主体性を尊重し、自己決定を支援していくのかについて具体的方法をみいだすことができなかったのである。そこで現在でも、本研究科にて一進一退を重ねながらその方法を追究してきているところである。

これまで社会福祉方法論では、一般に利用者の主体性や自己決定の尊重について、その重要性がいわれてきたが、理念だけが先行し、具体的な方法展開が十分に整理されてこなかった経緯がある。そのなかで近年、エンパワメントという概念は、利用者を取りまく環境的な側面を視野に入れ、広く生活全体を把握しながら主体性や自己決定尊重への方法を論じているために、その方法展開を深化することが可能であると考えられる。しかし一方でその課題は、主に①ソーシャルワークにどのような新しい視点をもたらしたかについて不明瞭であること、②近年登場してきた概念であるためにその概念整理が不十分であること、③利用者の主体性の尊重を謳いながらソーシャルワーカー側もしくは利用者側一方向からの考察にとどまっていること、そして④その理論的思考枠組みから実践までの一連の研究をとおした方法展開が未確立であること、などが挙げられる。

そこで本稿では、これらの課題を達成していくために、まずその第一段階としてエンパワメント導入によるソーシャルワーク方法論の特徴的な変化を、ソーシャルワークの視点の推移から考察し、エンパワメント概念導入の重要性を明確にする。そしてソーシャ

ルワークにおけるエンパワメントの登場背景や概念を整理し、その特徴について述べる。その特徴としては、エンパワメント概念がもつ利用者の認識を重視する点に着目する。なぜならエンパワメント概念は、当事者運動を起源として発展しており、当事者のもつ認識から問題解決を行うことを強調しているからである。さらにそれをふまえて、利用者を中心としたソーシャルワーカーとの協働の必要性を挙げ、両者で形成するエンパワメント協働過程を、理論から実践展開までをとおして体系的に研究する意義とその課題を指摘していきたい。以上をとおして、①～④の課題にこたえ、ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践展開を新たに提案していく意義を明確にしてみたいと考えている。

## 2. ソーシャルワークの視点の推移にみるエンパワメント導入の意味

### (1) ケースワークにみられる病理・欠陥的な視点

ソーシャルワークは、多様な実践理論、実践モデル、そして実践アプローチを保有している。それらは、実践過程を展開するための視点の内容と拡がり、利用者とソーシャルワーカーの関係、そして支援技術・技法、などが様々に異なっている。そのなかで特に視点は、理論から実践に通じる実践モデルを形成する際、その形態に特色や固有性をもたらすのである。それは、太田義弘によると実践モデルが「援助目的や方法、援助内容、援助対象などに焦点化してとらえる視点の相違」<sup>2)</sup>から導かれると指摘されていることから理解できる。そこでまずは、ソーシャルワーク

の視点に対してエンパワーメント導入がどのように関わっているかをみていく。

ソーシャルワークは、その成立当初、主にケースワークを中心に実践科学として体系化された。先駆者であるリッチモンドは、その視野を人と環境に向けることを強調したのである。それは、1922年にリッチモンドの著書『ソーシャル・ケースワークとは何か』で、ケースワークを「人間と社会環境との間を、個別に、意識的に調整することを通して、パーソナリティを発達させる諸過程からなり立っている」<sup>3)</sup>と定義していることから明らかである。

しかしケースワークは、1920年代からフロイトの精神分析学の影響を受け、全体的に精神分析学的方向への傾斜を強めていった背景がある。そのことによりケースワーカーは、援助を受けるクライアントの問題を彼の内的要因に焦点化し、治療に重点をおく病理モデルを採用することで専門性を強調したのである。それは、アーリーとグレンメイ (Early, T.J. & GlenMaye, L. F.) による指摘からも理解できる。アーリーらは、家族を対象としたソーシャルワークの発展を慈善組織教会、診断主義ソーシャルワーク、心理社会的アプローチ、問題解決アプローチ、1950年代以降の家族療法から概観する。そしてそれらの焦点が主にクライアントの問題と欠陥にあてられている<sup>4)</sup>と述べている。

その結果としてケースワーカーは、問題をもつ患者としてのクライアントに診断を通じた介入により処方を行う。このアプローチでは、「個人や家族がその変容過程において有能で積極的なパートナーではなく、サービスを受ける人とみなされてしまう」<sup>5)</sup>のである。そして、「治す役割となる専門家の援助を要する人間は受け身的で依存的と見る立場」<sup>6)</sup>

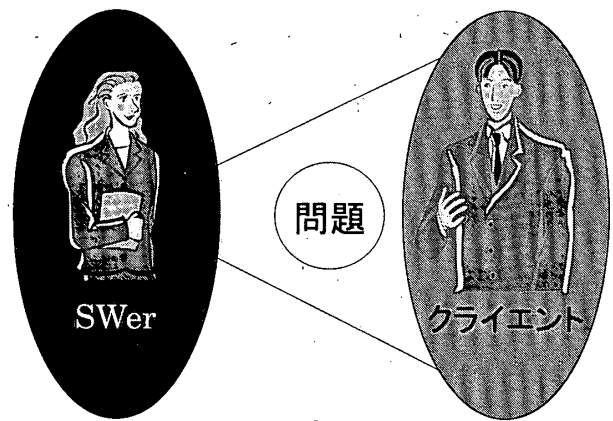


図1 病理・欠陥的視点

におかれたのである。すなわちこのようなケースワークは、主に個人を対象とし、その問題を個人の内的要因（病理や欠陥）に帰属させ、診断や治療のできるケースワーカー主導で援助を展開してきたのである（図1参照）。そして以降1970年代まで、主にこの援助展開が続いていくことになるのである。

## (2) ソーシャルワークとしての生活の視点

その後ソーシャルワークは、この病理・欠陥的視点の見直しを迫られる。それは、1960年代の貧困問題、人種差別、ベトナム戦争による多様な社会問題や社会福祉問題の出現によって、クライアントが増大したことによる。このような現実に対して、ケースワーク、グループワーク、コミュニティワークに分化した3方法での対応が次第に困難となり、ソーシャルワーク包括・統合化は目指されるようになったのである。それは、1970年代にソーシャルワーク包括・統合化へパラダイムを転換させたエコシステム (ecosystem) 論を中心に検討されるようになる。そしてソーシャルワークは、その視点を再び人と環境からなる生活に向けることになったのである。

これまでソーシャルワークは、「生活する人間や生活に対する視点を明確にしないで問

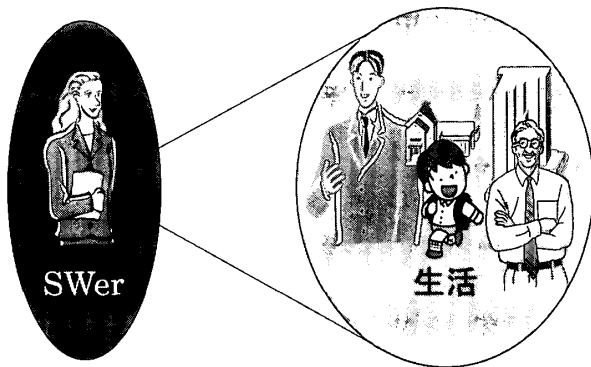


図2 生活の視点

題解決のための方法が中心」<sup>7)</sup>に検討されてきた。そのためにエコシステム論は、生活そのものを理解できる点で重視されるようになった。エコシステム論は、システムの思考と生態学的発想を兼ね備えることにより、伝統的な視点を統合、拡大できる枠組みを提供する理論である。そしてそれは、ソーシャルワークがリッチモンド以来重視してきた生活という人と環境の相互関連性を捉えることのできる視座<sup>8)</sup>として活用できるのである。また生活という人と環境の相互関連性の把握は、「環境における人の視野が、ソーシャルワークを他の援助／相談援助職と区別する主要因である」<sup>9)</sup>ことから、ソーシャルワークの専門的視野を提示できるようになったのである(図2参照)。

一般的にエコシステム視座は、メイヤー(Meyer, C. H.)が「エコシステムという言葉は、生態学と一般システム論という二つのアイデアを包括している」<sup>10)</sup>と述べるように、生態学と一般システム論を統合・止揚した人と環境の現象を捉えていくための見方である。そのアイデアの一つである生態学は、ジャーメイン(Germain, C. B.)によれば「有機体と環境とを適応していく過程と両者が力動的な均衡と相互関係を達成する手段とに関連する科学」<sup>11)</sup>である。そして一般システム

論とは、「交互作用している要素の集合、もしくは人と環境のような変数の体系的な連結を表現する総体としての一般科学」<sup>12)</sup>であり、ベルタランフィ(Bertalanffy, L. V.)によると「システムは、部分や過程が相互、交互作用をしている力動的な状態」<sup>13)</sup>を示すことができる。

このような生態学と一般システム論は、両者とも人と環境を捉えることができる理論である。特に太田は、これら生態学と一般システム論を援用しながら、それぞれの特性を活かして一方では、「生活という実体のリアルな実像理解を、人間と環境を含め動態として把握」<sup>14)</sup>し、「生活システムの時間的経過や変化を客観的に整理」<sup>15)</sup>する生態学的発想を用いる。そして他方で、「クライアントの生活をつうじて人や環境のシステムと動きを正確に理解する思考概念」<sup>16)</sup>としてその「動態を理解可能な要素に分解し、系統的な思考や記述方法を用いることによって、実態把握を説得力のあるものにしようとする」<sup>17)</sup>システム思考を活用すると述べている。そのうえでそれらを統合・止揚してエコシステム視座を理論的思考枠組みとして援用することは、人と環境、その交互作用からなる生活を理解し、ソーシャルワーク支援の枠組みを提供することになる。すなわちエコシステム視座は、システム思考により時間の流れにある人間と環境の相互作用をその構造や機能からシステムとして説明し、そのシステムの積み重ねを生態学的な発想から時系列に変容状況として把握することで、生活を実態的に捉えることを可能にしたのである。

### (3) エンパワーメント導入による新しいストレングス視点

エコシステム視座は、ソーシャルワークの

視野を人と環境からなる生活に向けることができ、病理・欠陥的視点からの転換に大いに影響を与えてきた。しかし、人と環境を把握できるエコシステム視座は、「利用者やその問題に対して基本的な方向を示唆する抽象観念であり、メタファーであるが、インターベンション（介入方法）を指図できない」<sup>19)</sup>という課題を抱えている。そこで、マンコースキーとハウゼカー（Mancoske, R. & Hunzeker, J.）による「エンパワーメントの視点が、生活モデルを活用する実践に方向性を与える」<sup>19)</sup>との指摘からも理解できるように、エンパワーメントは、生活を捉えながら行うソーシャルワーク過程を生活者としての利用者の長所や環境の改善に焦点をあて推進する志向方法概念として導入されたのである。

その具体的展開には、エンパワーメント実践に欠かせない構成要素としてのストレングス（strengths）視点が必要である。ストレングス視点は、1960年代までの病理・欠陥的視点にはなかった、あらゆる利用者の肯定的な能力を積極的に活用することに焦点化したもので、エンパワーメント概念ならではの視点である。そしてソーシャルワークは、その視点を個人のパーソナリティの問題に向けるだけでなく、その長所や環境的資源、問題の社会的側面にもあてられるようになったのである。またカウガー（Cowger, C. D.）は、「クライアントのストレングスはエンパワーメントのための燃料であり、エネルギーである」<sup>20)</sup>と指摘している。この指摘からもわかるように、ソーシャルワーカーは、利用者のストレングスに着目することからエンパワーメントを促進し始めるといえる。

具体的にストレングスは、マイリーらによると「生まれながらの能力、獲得した才能、

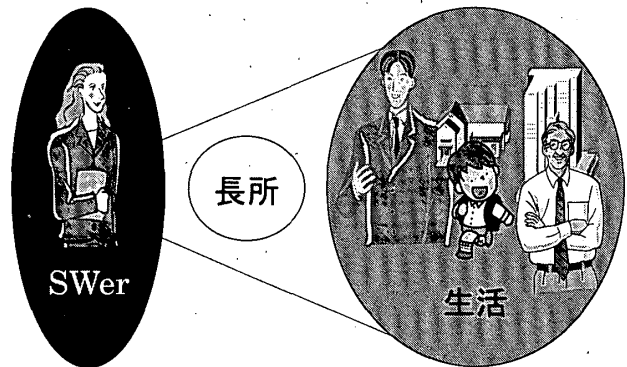


図3 スtrenグス視点

発達させたスキルなど、私たちがうまくできるもの」<sup>21)</sup>と指摘されている。またそれは、「私たちにとって明らかである特性、能力、行動などを含むだけではなく、かすかな成功や明らかでない将来性をも含む」<sup>22)</sup>ものである。また、家族へのストレングス・アプローチを展開しているアーリーとグレンメイは、ストレングスを「生きてきた自負、将来への希望、人のニーズや視野を理解する能力、個人や家族のゴールについて認識し、選択する能力を含む」<sup>23)</sup>ものとしている（図3参照）。

これらストレングスは、「すべての人が有しているとともに、家族などの集団、コミュニティも保有するもの」<sup>24)</sup>とされ、あらゆる利用者システムや生活のなかの資源にも拡大されて用いられている。しかし、病気や障害による生活状況の変化や差別などの抑圧的な社会状況に対応しきれなかった利用者は、ストレングスを潜在的に保持しているにもかかわらず、それに気づくことができない。そのため利用者は、パワーを発揮する自信やきっかけを失ってしまうのである。そこでエンパワーメント実践は、まず利用者がそのストレングスに気づくように展開されるのである。

このようにソーシャルワーカーは、ストレングス視点から利用者自身が肯定的な側面へ意識を転換し、その主観的世界でストレング

スを意識することにより、権利意識や自尊心をもち、気づかなかった能力に気づき、それを発揮するエンパワーメントを支援するのである。すなわちエンパワーメントの導入は、利用者のストレングスを尊重しながら、主体的な問題解決や課題達成を行うための視点をソーシャルワークに提供したのである。

### 3. ソーシャルワークにおけるエンパワーメント概念とその特徴

#### (1) エンパワーメントの登場とこれまでの流れ

ストレングス視点をもたらしたエンパワーメントがソーシャルワークに導入されるようになったのは、1950年代から60年代のアメリカにおいてである。それは、アフリカ系アメリカ人による公民権運動やブラック・パワー運動など、差別を受けてきた人々が権利意識に目覚め、様々な権利要求運動やセルフヘルプ運動を展開してきたことと関係している。

そのような状況と関わって、ソーシャルワークにエンパワーメント概念を導入したのは、ソロモン (Solomon, B.) であった。彼女は、それを「ソーシャルワーク専門職に見られる黒人に対する偏見・差別を除去していく多様な取り組みがなされたなかで経験した知見を基にして、黒人に対応するソーシャルワーク実践の視点と指針を示すことができる基本的枠組みを発展させ」<sup>25)</sup> するために用いたのであった。その後、エンパワーメントは、アフリカ系アメリカ人だけではなく、社会的ケアを受けなければならない高齢者、障害をもつ人たち、そしてエイズ患者などにも拡大されて、ソーシャルワークの対象すべてに適用されたのであった。

このような差別を受けてきた人々への支援をもとにリー (Lee, J. A.B.) は、現在のエンパワーメント実践が、5つに焦点化したビジョンをもつことによって発展していると指摘<sup>26)</sup> する。この5つのビジョンは、表1<sup>27)</sup> のように歴史的に差別を受けてきた人々への支援から整理されている。またそれらは、個人に起こる問題の環境的要因を理解する生態

表1 5つに焦点化したビジョンとその概要

5つのビジョン	概 要
歴史的な視野	社会政策との関連を含めた集団に対する抑圧の歴史を学ぶこと。エンパワーメント実践は、女性やアフリカ系アメリカ人、有色人種など貧困で抑圧されてきた人々への歴史的な支援にルーツがある。
生態学的な視点	生態学的な視点を確立することは、個人的、政治的なレベルでのエンパワーメントに必要な不可欠である。その視点は、個人の適応的な潜在可能性への知識を包含しており、パワーの知識とパワーを抑制する構造的な不平等や社会経済的な汚染の知識を含んでいる。
人種・階級的な視野	人種・階級差別の現実、そしてその相互作用で起こる現状に対する知識を敏感にする視点である。階級構造の詳細と貧困の影響、有色人種が抑圧などの不利な状況に対処するために発達させてきた適応機制に関する知識を含んでいる。
フェミニストの視野	女性に対する特徴的な抑圧を理解するための視点。女性を内的、外的な抑圧から解放し、個人的なことは政治的なことと理解することを促し、不平等な社会構造に立ち向かう。ポストモダンの思考である主流化を強調する。
批判的な視野	批判的な視野は、すべての抑圧の形態を批判し、個人的な変化と社会的変化を関連させる戦略を発展させるために必要とされる。抑圧の形態を疑問視し、代替的な社会形態を発達させる視点である。フレイレ(Freire, p.)による批判的教育に関する研究と関連している。

学的な発想、人種・階級・性に対する差別克服の実践と批判的思考の重視を特徴として挙げており、エンパワーメント実践の特徴を説明する手がかりとなる。

その後、ソーシャルワークにおけるエンパワーメントは、1970年代後半の病理モデルから生活モデルへの移行に伴い、従来の治療を受けるクライアントとしてではなく、生活の主体者としての利用者と自身の問題を積極的に解決しようとする点に焦点化した本人のストレングスに注目するようになってきた。特にそれは、エンパワーメント促進の視点として、今日理解されてきている。そして1990年代以降は、社会構成主義やナラティブ・セラピーの影響がソーシャルワークに新しい潮流をもたらしてきている。それは、まだ充分とはいえないがストレングスやエンパワーメントを強化してきている。このような状況をみてもソーシャルワークでは、近年ストレングスやエンパワーメントの位置づけが重視されてきていることが理解できるだろう。

## (2) エンパワーメントの概念

エンパワーメント概念は、前述したようにソロモンによって最初に定義された。それは、「スティグマ化されている集団の構成メンバーであることに基づいて加えられた否定的な評価によって引き起こされたパワーの欠如状態を減らすことを目指してクライアントもしくはクライアント・システムに対応する一連の諸活動にソーシャルワーカーがかかわっていく過程である」<sup>28)</sup>と1976年に定義された。このソロモンの定義は、エンパワーメントが利用者のパワーの欠如状態に着目し、利用者との協働による支援をソーシャルワーカーが行うことを強調している。

その後、ソーシャルワークを統合化するな

かでエンパワーメントの重要性を指摘したパーソンズ (Parsons, R. J.) らは、エンパワーメントを「人々が直面する問題をもものともせず行動を起こすことができるように自身を認めるようになる変化の過程である」<sup>29)</sup>と述べている。そしてその過程でのソーシャルワーカーの役割を「利用者が自身のエンパワーメント過程を引き出すように支援すること」<sup>30)</sup>としている。これらの指摘は、エンパワーメントが過程概念であり、そこでの利用者の主体性尊重を強調している。またソーシャルワーカーの役割は、利用者の決定に応じた利用者主導の実践を側面的に支援することであるといえる。このようなエンパワーメント過程の結果をリンホースト (Linhorst, D. M.) らは、「利用者がエンパワーメントから得る恩恵は、強められた自信、自己責任、そして自己効力感とともに改善された生活の質」<sup>31)</sup>であると論じている。

またアダムス (Adams, R.) は、「エンパワーメントとは個人、グループあるいはコミュニティがその状況 (環境) をコントロールすることができるようになることであり、自ら設定したゴールを達成することができるようになるプロセスである。それによって生活の質を最大限に向上させるための活動ができることである」<sup>32)</sup>と指摘している。そしてコックスとパーソンズ (Cox, E. & Parsons, R.) によれば、エンパワーメントとは「個々人がそれぞれの生活状況の個人的、対人的、もしくは政治的な側面に挑戦あるいは変革する活動に従事すること」<sup>33)</sup>である。これらの指摘は、ゴールを達成するプロセスが利用者システムとしての個人、グループそしてコミュニティとそれらを取り巻く状況を再構成する過程であると理解することができる。そのためにエンパワーメントは、生活全体を視野に入

れ、個人変容から社会改革までを志向し、展開するのである。

すなわちエンパワーメントは、国家、地方自治体、コミュニティ、住民の理解と参加による福祉社会を志向する広範な過程をも含むことが特徴である。そのため特に、基本的な人権の尊重やノーマライゼーションを大前提とした利用者契約制度や権利擁護施策などの充実を目指すのである。そしてこの個人変容から社会改革までの展開は、さらにそれに伴う成果が還元され、新たなパワーの源をつくる循環過程と考えることができる。

そこでこれまでの先行研究をふまえ、エンパワーメントの特徴をまとめてみると「エンパワーメントとは、利用者及び利用者システムが自ら、ストレングスを意識し、環境と関わりながら自己実現へ向けて自らと環境をコントロールするパワーを養う過程である。また、そのパワーをより社会的影響の強いシステムで活性化しながら行う社会改革への活動と、そのフィードバックからなる循環過程でもある」と理解することができるだろう。

### (3) エンパワーメント概念に特徴的な利用者認識の重視

これまでの指摘は、エンパワーメント概念がソーシャルワークに重要な視点や方法を提供していると理解できる。それは、①利用者のストレングスに焦点をあてること、②利用者を個人だけでなく、グループやコミュニティなども含めた利用者システムとして理解すること、③実践活動の範囲を拡大し、個人の変容から社会改革までを包含すること、そして④利用者自身の認識や活動を重視すること、などが挙げられる。

特に④利用者自身の認識や活動を重視することについては、エンパワーメントが当事者

運動を起源として発達してきたことから、この概念の大前提ともいえる。そしてこのことは、従来からのソーシャルワークで必要とされてきた利用者の主体性の尊重を具体化できるアイデアを提供するといえるのである。また利用者認識の重視については、近年ソーシャルワークのなかで人種・性差別からの解放などの当事者運動に思想を与えてきた社会構成主義やナラティブ・セラピーの影響により、さらに強化されてきている。

一般に社会構成主義は、「伝統的あるいは近代的な知の前提となっている方法論に懐疑的で、予め確固たる現実が定立されていたり、あるいは客観的な真理というものを想定するのではなく」<sup>34)</sup>、そしてまた「ひとびとが生きる生活世界の意味的な構成に着目」<sup>35)</sup>する。それは、1990年代以降の潮流であるポストモダンに基づく思想であり理論である。またナラティブ・セラピーは、家族療法のなかで発達してきており、社会構成主義を臨床場面で展開したものの一つである。

社会構成主義やナラティブ・セラピーは、ソーシャルワークにおけるこれまでのソーシャルワーカー主導で行ってきた実践やソーシャルワーカーによる客観的な利用者認識に偏重することに対して疑問を投げかけているといえる。そして利用者自身による生活やストレングスへの認識や問題解決方法に重点をおくのである。この考え方に基づくとエンパワーメント実践を展開するために重視されているストレングス視点は、ソーシャルワーカーが利用者の長所を発見し支援することだけを意味しているのではない。それは、ゴールドシュタイン (Goldstein, H.) によれば、ソーシャルワーカーが利用者を「物事を知っており、経験から教訓を学び、アイデアを持ち、あらゆる種類のエネルギーをもって、物事を



よくやりこなす存在」<sup>36)</sup>と認識することである。またグリーン (Green, J. W.) により「利用者が自身の生活について私たちに教示することを認める」<sup>37)</sup> ことが必要であると主張されている。すなわちストレンクス視点からソーシャルワーカーが行うエンパワーメント実践で重要なことは、「利用者との出会いを通じてワーカーが、潜在的なストレンクスに気づきをもたらすが、潜在的なストレンクスが利用者にとって現実であるかどうかを述べ、評価する立場にいるのは利用者だけである」<sup>38)</sup> ことを認めることなのである。

このようにエンパワーメント実践は、ソーシャルワーカーだけでは展開できない。ここでは、利用者が実践の中心となるべき主役であり、その人がもつ生活や問題、そしてストレンクスへの認識をソーシャルワーカーと確認していくことから展開していかなければならないのである。

#### 4. エンパワーメント実践展開研究の意義と課題

##### (1) 利用者協働による実践過程展開の必要性

エンパワーメント実践は、利用者とソーシャルワーカーがともに問題解決への「目標を目指したシステム関係の時系列的な変容」<sup>39)</sup> を効果的に引き出そうとする過程で展開される。それは、ステープルス (Staples, L.) の「パワーを得る、パワーを発達させる、パワーを保持もしくは把握する、もしくはパワーを促進、もしくは可能にする process として empowerment を定義するために power という単語に接頭辞 em を用いる」<sup>40)</sup> という説明からも実践過程概念として理解できる。この

エンパワーメント実践過程を展開するには、まずソーシャルワーカーが利用者のエンパワーメントを促進する視点を理解することが重要である。その視点とはストレンクス視点であり、利用者とともに彼の長所やプラス面を発見することから、エンパワーメント実践が始まるのである。

またそのストレンクス視点は、社会構成主義の考え方からソーシャルワーカーとの関係においても、利用者を積極的な主体者として尊重することを意味している。そこでソーシャルワーカーは、利用者を自らの生活を最もよく知り判断できる主体者として尊重し、利用者自身の言葉で語る生活状況を受け入れることが必要となる。そのためには、利用者とのソーシャルワーカーの協働を重視しなければならない。それは、アーリーとグレンメイが「ストレンクス・アプローチによる実践の主要な焦点は、ソーシャルワーカーと利用者の協働 (collaboration) とパートナーシップである」<sup>41)</sup> と述べる協働関係を意味する。この協働関係によりソーシャルワーカーは、利用者主導のエンパワーメント過程を側面的に支援するのである。

一般に協働とは、「利用者とのソーシャルワーカーが変化を促すために相互に資源を提供しあう」<sup>42)</sup> ことで可能となる概念である。それは、「利用者が自らの経験について専門的知識 (expertise) をもたらし、ソーシャルワーカーが専門的介入のプロセスについての専門的知識 (expertise) をもたらす」<sup>43)</sup> ことで両者の知識を平等に認め、相互に活かすことで成り立つと考えられる。すなわち利用者の専門的知識とは、彼の生活問題への認識と生きてきた経験やストレンクスに基づいた解決策である。そして、ソーシャルワーカーの専門的知識とは、生活状況を理解する

ためのエコシステム視座から得るものであり、エンパワーメントを促進する支援過程の展開方法に他ならない。さらにこの2つの資源は、分かちあわれ「協働的同盟関係をとおして創造される相助作用した資源」<sup>44)</sup> という協働によるパワーを生み出すのである。

このように利用者にとっての協働は、パワーを獲得する源泉となる。そして、利用者の生活を自身の認識するストレングスから転換していくための肯定的な関係であり、利用者がストレングスを意識し、エンパワーメントへ向けて行動するために重要となるのである。そして、そこにソーシャルワーカーが生活を支援する専門職として関わることで、利用者とソーシャルワーカー協働によるエンパワーメント実践は展開できるのである。

## (2) 協働過程考察からのエンパワーメント実践展開研究の意義

利用者とソーシャルワーカーとの協働関係によるエンパワーメント実践は、過程として展開される。そこで、この実践過程を詳細に考察していくことは、効果的なエンパワーメント実践展開を構築するために重要となる。すなわちソーシャルワークにおけるエンパワーメント実践展開を過程として研究することが必要不可欠なのである。

その過程研究は、①ソーシャルワーカーによるエコシステム視座からの支援過程と、②利用者のストレングス視点からの変容過程が、③包括・統合的に展開する利用者とソーシャルワーカー協働によるエンパワーメント実践過程を深化することで可能となる。従来の研究では、①ソーシャルワーカーによるエコシステム視座からの支援過程、②利用者のストレングス視点からの変容過程、のいずれかを中心にして行われることが多い。そのた

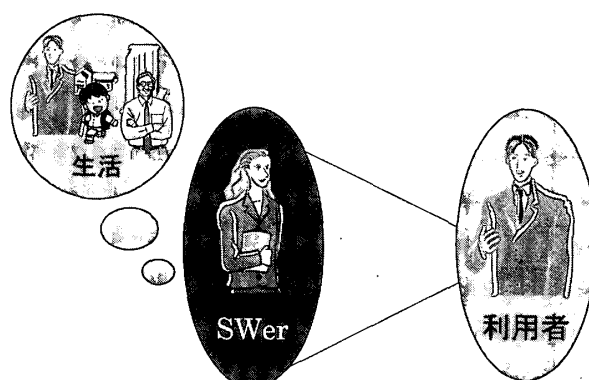


図4 協働的思考枠組み

めその包括・統合的な研究は、まだ始まったばかりであると考えられる。そこで本論では、ソーシャルワークにおけるエンパワーメントの必要性を指摘しながら、エンパワーメントという観点からソーシャルワーク実践過程を深化していくことの重要性を述べてきた。

その実践過程は、利用者とソーシャルワーカーによる協働過程として理解できる。具体的にそれは、ソーシャルワーカーがエコシステム視座を保持しながら、共に利用者にとって個別な出来事や状況のもつ独特な意味を探求することから推進されるのである。そのためには、一方でソーシャルワーカーのもつエコシステム視座により、拡がりを持続しながら生活というエコシステム過程をとらえ、他方では利用者自身の生活認識によりその実像に迫りながら、ストレングス視点からエンパワーメント過程を展開していくことが重要となる。すなわちそれは、新しい理論的思考枠組みの形成を必要としているのである(図4参照)。

それは、ソーシャルワークがこれまで専門職として重視してきたエコシステム視座と利用者自身の認識を重視する社会構成主義的見地との両者の観点から形成することで可能となると考えられる。このことを考慮しながら、利用者とソーシャルワーカーの協働により展

開するエンパワーメント実践過程の新たな思考枠組みを提案することから始めることは、実践展開研究としての意義があると考えられる。エンパワーメント実践においては、ソーシャルワーカーだけでなく、利用者自身の生活への認識や見方が重視されなければならない。そのことは、社会構成主義的見地を考慮することによって理解することが可能になる。しかしそのことにより、ソーシャルワーカーの専門的見方が排除されるのではない。その見方は、協働という立場からも利用者を支援する見方として必要とされなければならないだろう。そのためには、エコシステム視座を利用者の生活を整理するソーシャルワーカーの専門的見方として位置づけ、協働の実現を図る思考枠組みを形成することが重要となるのである。

### (3) 今後の研究課題

エンパワーメント実践展開研究の新たな思考枠組みは、ソーシャルワーカーの専門的知識であるエコシステム視座と、利用者の現実を重視する社会構成主義的見地から構築できると考えられる。そのために今後の課題としては、その両者の特性や関係性を考慮しながら、その包括・統合的な思考枠組みを具体的に提示することである。そしてその枠組みに基づく、実践モデルの形成とその実証研究が必要不可欠である。

ソーシャルワークは、これまでも他領域から様々な理論を導入してきた。そして、それらの理論を折衷したり、包括・統合化を行いながら応用科学として発展してきている(図5参照<sup>45)</sup>)。このような点では、エコシステム視座と社会構成主義からのエンパワーメント実践展開を構築していくことは不可能なことではない。しかしながら社会構成主義の考

え方は、従来の科学を批判するために登場してきたといっても過言ではない。そのために、エコシステム視座との包括・統合化は、決して容易とはいえない。しかしそれは、社会構成主義が従来の科学をどのように批判的にみているかについて検討し、さらに批判することで関係する点に着目しながら、その共通特性と新しい統合点をみい出すことができると考えている。今後は、このような観点からエコシステム視座と社会構成主義的な見地による包括・統合的展開を検討していきたい。

またそれは、理論構築にとどめることなく、現実の利用者との協働による実践へと昇華することが実践展開研究において不可欠である。そのためには、芝野松次郎のいう実践理論システムの構築を考慮する必要がある。それは、抽象性が高く、社会福祉のさまざまな領域をカバーし、幅広い実践を説明することができる「包括的实践理論 (comprehensive practice theory)」、実践に即応して提供するために対象者や対象問題あるいは対象援助技術を限定し、具体性を高めた「限定的実践理論 (specific practice theory)」、具体的な実践方法を解説した「実践モデル (practice model)」、そしてその詳細な手続きが示される「実践マニュアル (practice manual)」から構成される<sup>46)</sup>ものである。エコシステム視座や社会構成主義などは、包括的实践理論であるために、それを基盤にエンパワーメントという観点から限定的実践理論や実践モデルとして展開過程を整理し、実証研究を通じた具体的な方法展開を構築していきたいと考えている。

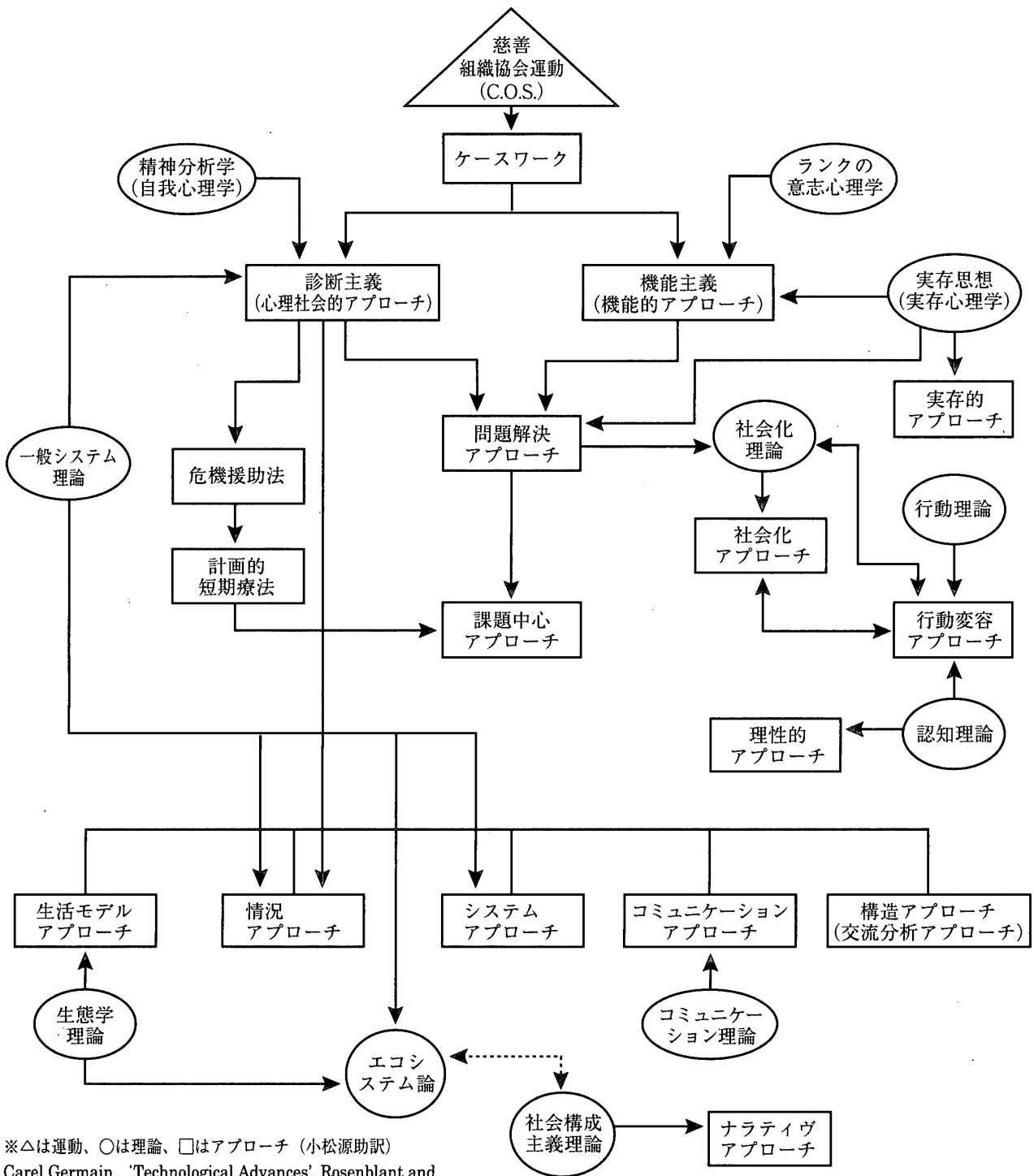


図5 ケースワークの発展からみるソーシャルワークの現状

## 5. おわりに

ソーシャルワーク支援には、利用者が参加

し協働することが重要である。それは、利用者自身の主体的な問題解決を促進し、協働を実現するエンパワーメント実践によって可能となるのである。このような利用者主体の流

れは、他領域でも同様であり、すでに医療領域では、インフォームド・コンセントやセカンド・オピニオンなどにより利用者主体の医療が行われ始めている。また社会福祉制度・政策面をみると、1998年に中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会が、社会福祉法制定に先立って「中間まとめ」を発表した。そのなかでは、「サービス利用者と提供者の対等な関係の確立」が改革の基本方向の一つに挙げられている。そして2000年には、利用者主体を主眼においたサービス利用契約に基づく介護保険制度、2003年には、障害者分野で支援費制度がそれぞれ施行されてきた。これらの制度・政策に対応していくためには、エンパワーメントによる利用者主体の社会福祉方法論確立が急務の課題といえよう。

しかしながら、ソーシャルワークにおいてこのようなエンパワーメント実践は、まだ理念的であり、具体的な方法として整理し始められたところである。その一方では、理念だけが先行したスローガン実践であるとの指摘も出てきた。このような動向のなかで、現実の利用者への有効な方法確立のためには、利用者とソーシャルワーカーとの協働からなるエンパワーメント実践過程を詳細に分析し、さらに実証研究をふまえた実践展開研究を行っていくことが一大課題なのである。

<注>

- 1) わが国においてエンパワーメントは、『ソーシャルワーク研究』Vol.21, No.2, 相川書房, 1995年で特集が組まれたことが導入の大きな契機となっていると考えられる。
- 2) 太田義弘著『ソーシャル・ワーク実践とエコシステム』誠信書房, 1992年, p.147。
- 3) メアリー E. リッチモンド著, 小松源助訳『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』中央法規,

1991年, p.57。

- 4) Early, T.J. and GlenMaye, L.F., "Vlaluing Families: Social Work Practice with Families from a Strengths Perspective", *Social Work*, vol.45, No.2, 2000, pp.121-122.
- 5) Christensen, D.N., Todahl, J. and Barrett, W. C., *Solution Based Case Work: An Introduction to Clinical and Case Management Skills in Casework Practice*, Walter de Gruyter, 1999, p.7.
- 6) 平塚良子著「生態学的アプローチのパラダイム分析と今後の展望」『ソーシャルワーク研究』vol.21, No.3, 相川書房, 1995年, p.17。
- 7) 佐藤俊一著「ソーシャルワークにおける生活への視点—生活の連続性を支える基礎的地平の理解—」『淑徳大学社会学部研究紀要』第32号, 淑徳大学社会学部, 1998年, p.33。
- 8) 秋山薊二は、「視点とは一つの立場もしくは見方から現象や事象を捉え理解することであるが、この立場や見方が複数になった時、複眼的立場から現象や事象を把握していかなければならない。基盤は一つであっても、焦点化するポイント（視点）が複数存在するとき、それを視座と呼んでいる」と述べている。太田義弘・秋山薊二編著『ジェネラル・ソーシャルワーカー—社会福祉援助技術総論—』光生館, 1999年, p.50。
- 9) Lehmann, P. and Coady, N. (eds.), *Theoretical Perspectives for Direct Social Work Practice : A generalist-Eclectic Approach*, Springer, 2001, p.6.
- 10) Meyer, C.H. and Mattaini, M.A. (eds.), *The Foundation of Social Work Practice*, NASW Press, 1995, p.19.
- 11) McMahan, M.O., *The General Method of Social Work Practice : A Generalist Perspective*, Allyn and Bacon, 1996, p.25.
- 12) Meyer, C.H. and Mattaini, M.A. (eds.), *op. cit.*,

- p.19.
- 13) McMahon, M.O., *op. cit.*, p.25.
- 14) 太田義弘編 『ソーシャルワーク実践と支援過程の展開』中央法規, 1999年, p.32。
- 15) 太田義弘・秋山薊二編著, 前掲書, p.85。
- 16) 同書, p.85。
- 17) 太田義弘編, 前掲書, p.32。
- 18) Lehmann, P. and Coady, N. (eds.), *op. cit.*, p.66.
- 19) Lee, J. A.B., *The Empowerment Approach to Social Work Practice*, Columbia University Press, 1994, p.14.
- 20) 小松源助著 「ソーシャルワーク実践におけるストレングス視点の特質とその展開」『ソーシャルワーク研究』Vol.25, No.4, 相川書房, 1996年, p.46。
- 21) Miley, K.K., OMelia, M. and Dubois, B.L., *Generalist Social Work Practice : An Empowering Approach*, Allyn and Bacon, 1998, p.205.
- 22) *Ibid.*, p.205.
- 23) Early, T.J. and GlenMaye, L.F., *op. cit.*, p.124.
- 24) 狭間香代子著 『社会福祉の援助観—ストレングス視点・社会構成主義・エンパワメント』筒井書房, 2001年, p.135。
- 25) 小松源助著 『ソーシャルワーク実践理論の基礎的研究—21世紀への継承を願って—』川島書店, 2002年, p.154。
- 26) Lee, J. A.B., *op. cit.*, p.22.
- 27) 本表は、リーの見解をもとに筆者が作成したものである。
- 28) 太田義弘・秋山薊二編著, 前掲書, p.125。
- 29) Parsons, R.J., Jorgensen, J.D. and Hernandez, S. H., *The Integration of Social Work Practice*, Wadsworth, 1994, p.107.
- 30) *Ibid.*, p.107.
- 31) Linhorst, D.M., Hamilton, G., Young, E., and Eckert, A., “Opportunities and Barriers to Empowering People with Severe Mental Illness through Participation in Treatment Planning”, *Social Work*, vol.47, No.4, 2002, p.426.
- 32) 小川喜道著 『イギリスの障害者福祉 障害者のエンパワメント』明石書店, 1998年, p.167。
- 33) Cox, E. and Parsons, R., *Empowerment-Oriented Social Work Practice with the Elderly*, California : Books / Cole Pub. Com., 1994, p.39.
- 34) 木原活信著 「社会構成主義によるソーシャルワークの研究方法—ナラティブ・モデルによるクライアントの現実の解釈—」『ソーシャルワーク研究』Vol.27, No.4, 相川書房, 2002年, p.28。
- 35) 野口裕二著 「構成主義的アプローチ—ポストモダン・ソーシャルワークの可能性—」『ソーシャルワーク研究』vol.21, No.3, 相川書房, 1995年, p.29。
- 36) スーザン・ケンプ著 「直接処遇におけるアセスメント：クライアントの強さの建築」『第2回テルウェル社会福祉セミナー報告集 社会福祉援助技術の現状と展望』財団法人電気通信共済会, 1995年3月, p. 64。
- 37) Bein, A. and Allen, K., “Hand in Glove? It Fits Better than You Think”, *Social Work*, vol.44, No.3, 1999, p.274.
- 38) Miley, K.K., OMelia, M. and Dubois, B.L., *op. cit.*, p.206.
- 39) 太田義弘著 「ソーシャル・ワーク実践過程への情報処理とその意義」『北星論集』第23号, 1985年, p.11。
- 40) Parsons, R.J., Jorgensen, J.D. and Hernandez, S. H., *op. cit.*, p.106.
- 41) Early, T.J. and GlenMaye, L. F., *op. cit.*, p.120.
- 42) Miley, K.K., OMelia, M. and Dubois, B.L., *op. cit.*, p.124.
- 43) *Ibid.*, p.124.
- 44) *Ibid.*, p.332.

45) 大塚達雄・阿部志郎・秋山智久編『社会福祉実践の思想』ミネルヴァ書房，1989年，p.109を参考に筆者が一部追加して作成した。

46) 芝野松次郎著『社会福祉実践モデル開発の理論と実際』有斐閣，2002年，pp.28-47。